



口絵

泰緬鉄道地図 8

泰緬鉄道の駅・俘虜収容所の所在地 10

はじめに 13

泰緬鉄道の短い解説——日本語版の出版にあたって 29

I 戦争責任を考える

戦争責任を考える……………ガバン・マコーマック 49

——オーストラリア裁判で明らかになったこと

日本は捕虜をどのように管理したのか……………内海 愛子 117

泰緬鉄道のロームシヤ問題……………村井 吉敬 149

II 歴史と回想をとおして戦争を見る

泰緬鉄道の思い出……………トム・モリス 169

ぞうと人間と……………ヒュー・クラーク 185

鉄道との接点……………デイック・ギルマン 196

囚われの旅……………トム・ユーレン 206

一九四六年と一九九一年……………サー・エドワード・ダンロップ 217

加害者の一員として……………李 鶴来 228

III 個人体験から国民体験へ

泰緬鉄道考……………

ハンク・ネルソン 241

——個々の人生から国民的歴史へ

資料1 鉄道におけるオーストラリア部隊

資料2 戦争捕虜の死亡率比較

泰緬鉄道の朝鮮人軍属……………

内海 愛子 283

チャンギ未決拘留の体験……………

李 鶴来 307

捕虜たちの賠償請求……………

デイビッド・バレット 317

——今後の課題

歴史から何を学ぶのか……………

ガバン・マコーマック 323

ハンク・ネルソン

資料・泰緬鉄道メモ 346

参考文献 347

統計表・図表等一覧 349

あとがき 351

著者略歴 356

「教育水準が低い日本の家庭においては、平手打ちということは、一つの躾の仕方として行われてゐるのであります。日本の陸海軍に於いてこれは禁止されていますが、国民の習慣に影響されて、事实上は依然行われてゐるのであります。これは勿論禁止されねばならない習慣であります。それは止めなければなりません。しかし、私はそれが犯罪であると考へません。それは習慣上からおこる處のものであります」(『極東国際軍事裁判速記録』14号、雄松堂、一九六八年)。

(17) 日本政府はサンフランシスコ講和条約第一一条の実施のため、国内法を定めた。法一〇三号である。この法律では、条約にあった「日本国民」が「者」という表現にかえられている。くわしくは、拙著『朝鮮人B・C級戦犯の記録』(勁草書房)を参照されたい。

(18) 一九九一年一月二日、韓国人・朝鮮人戦犯七名は日本政府に国家補償と謝罪を求める裁判を起こした。

(19) 朝鮮人戦犯たちが、いかに苦悩して死んでいったのかは、前記拙著、文泰福・洪鐘黙『死刑台から見えた二つの国』(梨の木舎、一九九二年)を参照されたい。

チャンギ未決拘留の体験

李 鶴 来

李鶴来さんのチャンギ刑務所での体験は、セミナーで報告された。

ここには、戦後、巢鴨刑務所で李さんが執筆した『私の手記』(未刊行)のなかから、関連の部分を掲載する。

戦争が終るや「聯合軍捕虜を虐待した者は厳罰に処す」ということがラジオで放送されたが、捕虜監視員であった私は他人事のように思い心配することはなかった。日本軍隊から解放され、解放された祖国にかえるのを待望していた。敗戦後、捕虜の一般日本人に対する暴行は勿論、現地の住民の婦女子を恥かしめ、飲食店に行つては飲みっぱなし、又われわれと街かどで偶然に出逢つた時などいろいろな因縁をつけ暴行を加へ、その上着物まで強奪され、パンツ一枚で帰つて来た友達が多かつた。特というわけで住民の捕虜に対する反感は強く、その反面一般日本人にはそれだけ同情的であつた。特に「高麗」といへば格別なもので、多くの中国人は「中国と高麗は昔から兄弟国」であると言つてわ

が祖国の解放を祝福してくれた。「九月二十八日の夕方まで高麗人会（終戦後、軍属―捕虜監視員を主体とした会）に集合するよう、若し集合しない者に対しては処罰する」という聯合軍の命令があり、生活が苦しいためにバラバラに住居していた私達は指定所に集合した。周囲は自動小銃をもった兵隊が警戒していた。聞くと明朝「クビジッケン」（首実検）をするというのである。

私はこれを聞いても別に驚くことはなかった。翌日になると元英豪蘭の捕虜が五〇名ばかり来て英豪蘭の順序で「クビジッケン」場（六ヶ所）をもうけ、ものものしい警戒ぶりの中で一列縦隊に列んで「クビジッケン」が始まった。結局この六ヶ所を無事にパスしなければならぬのである。その日の「クビジッケン」で約五〇名ばかりがひっか、った。私はその中の一人であった。われわれは所用の荷物を持ち、彼等が言うがま、に乗車し、友達に話もかけられず別れた。車はバンコク郊外の両側に椰子樹が茂っている道路を走っていった。車上では英国兵の強迫により、財布から万年筆までどこかにつれていくのではないかという不安感に襲われたから。しかし約一時間ばかり走って着いたところはバンコク郊外にある「バンワン」刑務所であった。

そこにはすでに収容所の職員及び数十名の同僚が来ていた。その刑務所は非常に古い木造建で広間になっていた。われわれは重罪犯人として高壁に囲まれて鉄格子のついた二階のコンクリ建に収監された。後になって木造建の広間には作業隊及び印度国民軍が千余名はいつて来た。それから印度假政府の要人、七、八名がわれわれが居る建物に収監されていた。いわゆる重罪犯人として収監されてゐたのは約二七〇名であった。この刑務所はもとより設備は悪く、便器のクサミはひどく、何も支給さ

れず各自の所持品で間に合せなければならなかった。水浴は雨水で週に一回出来れば良い方で、飲水さへ不十分であった。給養は日に三食であったが極く少量であった。

ときたま印度国民軍から内緒で物質的援助を受けたこともあった。ともかく彼らはわれわれに同情的であった。ときどき炊事でたく薪をとり、外部のジャングルに出ることがあったが、監視兵は印度人で比較的ルーズであったから逃げようと思へば容易に出来たが、私自身取調べを受けたこともなく、取調べを受けて帰った人の話も極く楽観的であったし、虐待なんてしたおぼえはないし、若しあったとしても第一次大戦後のドイツ戦犯から推してせいぜい五、六ヶ月のものだろう。だから逃げて隠れて住むよりも、五、六ヶ月辛抱して、自由な身になった方が良いと思った。それから毎日強制体操をやらされ、その後は草とりをやらされた。三月初旬から時々二、三人、四、五人と空路でシンガポールへ送られて行った。私は四六年四月下旬海路でシンガポールに着いた。

309 チャンギ未決拘留の体験

トラックはわれわれをチャンギ刑務所に運んだ。まづ最初に厳重な私物の検査が行われ目ぼしいものは皆とり上げられてしまった。当時の番兵は元捕虜のオランダ兵であった。その次が「白バント」（われわれは部隊の名を知らないから英兵が白バントをしていた、め「白バント」と呼んでいた）時代、それから赤帽（われわれは部隊名を知らないからラッカサン部隊の英兵が赤帽をかぶってゐた、め、「赤帽」と呼んでいた）時代となつてゐる。外観はコンクリート三階建の立派なアパートであるが実は地上の地獄であつた。私がここに着いた当時はわれわれの一挙一動は笛によつて行われ、それに違反した者はそれ相応に殴られた。給養は日に二食で、トモロコシ（テーブル・スプーンで三匙程）一食と、メリケンコ、タビオカ粉をとかした（うすくとかした）水みたいなものが登山用コップ二杯程であつ

た。毎日炎熱下で強制体操や、コンクリートの上に砂をまきコンクリートが真白くなるまでこすった。その上捕虜を監視したというだけで、タイ（彼らはタイと言えばあの死の鉄道を思い出すらしい）で勤務したというだけで呼び出され、へと／＼になるまで走らせたり、気絶するまで殴られた多くの友達を目撃した。又腹が「へったか」ときかれて「へった」と言えば水道の蛇口に口をつけさせて蛙の腹のようになるまで水を飲ませ、厭だと言えば殴打行為が始まり、また、ある者は食物やドロロンコをどっさり持って来て食はせ、厭だと言へばそこでまた殴打行為が始まる。

私は団体処罰を除いては、集合が遅かったといってバケツ一つを番兵つきで午前中、磨かされたことがある。運悪く彼らにひっかかったが最後、申し送り制度で毎日毎日暴行が加へられた。この虐待の中にありながらも、寝ても起きてても食物の話ばかりであったが、その話も長続きはしなかった。話しをする力さへなくなってしまうのだ。この虐待は「白バンド」「赤帽」時代になるにつれて度を加へていった。九月頃になると裁判も軌道にのり、裁判のために監禁（皆と接触出来ず独房）される者が多くなってきた。

われわれ一般に対する虐待はいぜんとして続いたが、監禁されている仲間に対する彼らの暴行は強化した。私の監房の前には監禁されている十数名の仲間がいた。彼らは、毎日、毎夜殴られ、蹴られ、走らされた。毎晩の如く真夜中に前の監房のうなり声によって、目を醒まさせられた。「チクシヨウ、また、やりあがつたな」と独言をいう。同居の二人（一つの監房に三名）も目を醒まさせられた。しばし、沈黙がつく。それから何事か話が出るが、きまつて食物の話でおわる。寝ても、起きても、食物食物で、空腹と虐待で自分の身のことで一杯で、故郷のことなど考える余裕がなかった。

こういう環境の中で容疑者らは甘言と強要で取調べを受け、後日、その書類に署名を求めて来るが前日言ったこと、はかなり相異がある。ある者は白紙に署名を求めて来る。それに対して強要と、厭世感——どっちでも良いから早くかたづけしてくれ——から、これに署名した多くの者があつたことを聞いた。これはスガモでの戦犯調査表（一三六ページの表参照）が示している。調査時の圧迫感というもの、程度の強弱こそあれ取調べを受けた者の共通した感じであった。

そのほかに彼らは権力と金力をもって現地の住民を買収し、証拠をツクリ上げたことは言うまでもなく、あらゆる宣伝機関を利用し、証拠の収集に全力をつくした。その反面、自由を奪われたわれわれにとつては手の打ちようもなく、法廷における唯一の自己証言でさへ認められず、また起訴事実に対する反証をすることさへほとんど許されなかつた。口には人道主義をとなえる彼らが——彼らがした行為は棚上げしておいて——一体われわれにどういう起訴状を与えたのか。それは文面の内容と字句は異つていても、一口に言へば「非人道的行為」をしたというのである。こういう起訴状で裁判が進行し、五割までが死刑宣告を受けている。だれでも裁判に附されれば死刑を覚悟しなければならなかつた。裁判は、全く形式でわれわれの言ひ分は一つも通らなかつた。

それに加えて、下級者の苦悩は合同裁判における旧上官との闘争である。これは上官が下級者に責任を転嫁しようとするところから起つた。それから、われわれ朝鮮人の場合は特にひどかつた、弁護士の民族的偏見と軍隊の階級の先人観から来る不誠意と不親切さは実に不満であつた。二重にも、三重にもハンデキャップを受けねばならなかつた。

概して他人のお陰で好い物を食ひ、好い着物を着て育つた苦勞を知らない旧上級者等は、食物にし

ても、裁判時にしても醜態を示していた。軍服を着て長刀をつつたあの時の権威は微塵もなかった。あゝ、いう人達がよくも部下を指揮したものだと思つた。なんでもかんでも命令連発主義の彼らは、無力化するや実にみじめなものである。人間的にゼロであつた。然しその反面、尊敬に値する多くの上官もいた。比較して苦勞した下級者達の行為は立派であつた。実に人間の人格というものはいくら美辭麗句を言つても平時には分からないもので、こういう逆境に陥つた時でなければ分からないものである。

日に二食給与は約四ヶ月つき、それから三食になつたが、量からすればたいして変つていなかった。やはり虐待は絶えなかつた。然し皆は虐待にも、裁判にも大分馴れて来ていた。弁当（飯で量もかなりあつたという）持ちで裁判に行く人達は、裁判はどうでも良く、その弁当を食べるのが楽しみであると言つてゐる。一方的な裁判では極刑、重刑が課せられ、死刑囚と長期刑囚は日をおつて人数が増えていった。

私はたつた一回取調べを受けた。（中略）

起訴状を受けてからの監禁生活は実にひどかつた。毎晩、夜中に部屋検査はするし、彼らの機嫌いかんによつては殴られもした。又、昼間は隔離された約十坪ばかりの処に監禁者を出しておくが日除けもなく、雨除けもない処に照つても降つても、出しつばなして時間にならなければ内に入れてくれなかつた。

いつ裁判になるか知らないが、弁護士も一回会つたさきで何の打合せもしないなかつた。白村大尉（死刑囚）は私が起訴されたことを聞き自発的に私の証人を引受けてくれると言つ連絡があつた。

「広村には何の責任もない。その責任は私にある。心配するな、しっかりと頑張つてくれ。」この連絡を受けた私は彼的美筆——人々はどうせ死刑囚で死んでゆくのだからと考へるかもしれないが、この時彼の刑は確定してゐない——に対して感涙を禁じえなかつた。十月二十四日、事務所から番兵が呼びに来たので弁護士が来たのか？ 或はあれから一ヶ月もなつてゐるのだから明日から裁判になるかも知れないと思ひながら、番兵にせかれるようにして事務所に着いた。意外にも「起訴状が却下された」という伝達である。

それで、その日から独房監禁は解除された。起訴状が却下されても一つも嬉しくなかつた。どうしてあれだけの起訴状を出しておいて、一ヶ月もたつた今日、逆に却下になるとは？ 一つの疑問が残つた。

とにかく十二月二十四日釈放になり、作業隊がいる復員船待所のジュロン・キャンプに着いた。ここは設備は悪く、熱地用天幕を張り、七、八名が同居した。給養も非常に悪かつた。作業隊では、刑務所から出た者だけとはきたま特別にナツメ羊かんを配給してくれた。たゞ刑務所から出たという気晴しだけであつた。それも二、三日の間だけで、毎日毎日刑務所からジープで一人、二人迎えに来るので実に不安に満ち、何時も英兵が私を尾行しているような気がした。それに乗船日は延び延びになり、四十七年一月七日に乗船日はきまつた。幸に迎へがなく、一日千秋の思いで待つたその日が来て復員船に乗船した。

これで安堵の胸をなでおろし、いよいよかえられるのだと思つた。船は炭荷船をちよつと改造したもので船内は狭く、風通しも悪かつた。もやしみたいにきっちりつめられた。船の給養は三食であつた。

が空腹を凌ぐ程度で水浴びどころかお茶もろくに飲めなかった。こういう中でも「目玉の青い奴」がないのと家にかえるのだという気分から、もうすこしの辛抱だと思つて皆は不満もみせず良く語り、その狭苦しい中でも麻雀や囲碁や、トランプに夢中であつた。佛印のサンジャクを過ぎると少し冷気がした。

一月十九日、石炭や水を積載するために香港に寄港した。船上から眺められる香港は山の麓から山頂まで、マッチバコを伏せたようで、いたるところに道路が通じているのが見られ、一見別荘地を思わせるものがあつた。夜景は実に美しかった。翌々日、昼食がすんで食器を洗つてかえると、英軍将校が召喚状をもつて三名の日本人を迎へに来たという話であり、その中にはコーリアン・ガードのヒラムラという名前があるというのである。これを聞いて暫くしてみると、連絡係(船内)が気毒のような表情をして次の事を私に伝へた。「指揮官(復員者の中で選出)はヒラムラという名前を持つてゐる人はこの船には乗つていないから」と頑張つたが、英軍将校曰く、「それではその名前に一番近い名前の人を出せ。若し人違いであればこの船が出帆する前に帰してやる」と。

あ、二度と見まいと思つたあの地獄、あのチャンギに又ゆかねばならぬのか!!

ゆくより投身自殺でもしてしまふか。いやまあ待てと、内心止めるものがある。なんという不運極まる奴だ!! 自己の運命をのろわざるを得なかつた。私のゆく処はチャンギ以外にはない。あの却下された起訴状がくるに違いない。直ぐにシンガポールに行くと思つたから、全部の私物は友達に分興し、着のみのま、(夏衣袴)の身支度をし、事務室に急いだ。もう二人は来て待つていた。われわれ三名は友人、全復員者に見送られ、水上艇は海面を滑り出し、約二千米ばかり離れた香港市に向つ

た。船上の人々は何時までも手振つてわれわれを見送っている。上陸すると待つていた三名の英兵にせかさながらトラックに乗り、山の頂上まで通じているうねりうねつた道路の両側の小松を十年振りで見ながら、寒さにいくらかふるへながら、約三〇分程ドライブして山の裏にあるスタンレー刑務所に着いた。

当時、この刑務所は民政で一面を日本人戦犯が使用しており、「白バンド」が警戒にあたつていた。戦犯容疑者の日本人は約百名(うち既決囚が七、八名、死刑囚が一名)いた。私にあたへられた独房は、一間半ぐらいのコンクリートの独房で、その中には寝台代用の板と便器、毛布一枚があるだけで、外には電気のスイッチから監房の標札、やたらに真ちゅうがついている。

この刑務所は海岸にあつて、二階から眺められる航行する船は一層私を悲しませた。旧在所者らとわれわれとは接触が許されていなかったが、番兵の監視をかすめて彼らの中の或る者はニュースを求めてわれわれの処に来た。天気が悪いと日中刑務所は霧の中にあり、晩は非常に寒かつた。私は着のみのま、降りたものだから毎晩寒くてほとんど眠れなく、友達に分興した私物をもつて来たら良かつたのにと後悔した。給養は日に三食であつたが、朝はビスケット四、五枚、コップ一杯の汁(キャベツ一、二キレが浮いている)昼、夕食が飯(おカユの固い程度のもの)が登山用コップ一杯、汁である。この他砂糖、脂肪類(一週間分)は個人宛現品給与であつた。この砂糖とて、コップ一杯の水を甘くするにもたりなかつた。脂肪類も極く少量であつた。この現品給与は日本人の希望によつたものだとする。当時日本人は炊事に勤務者はなく、現地人間ばかりやつていたから横流れが多いという理由からだそつた。

午前、午後一回づつ約三〇分間の散歩があるが、かれら式の強制体操をやらせるものだから、皆はいや／＼ながら散歩に出ている。それから毎日の真ちゅう磨き、点呼の際は一時間前から各監房の前に立され、点呼に来た将校は必ず不動の姿勢が悪いとか、しんちゅう磨きが悪いとか言つて、たまには手帳に名前を書いていく者もいた。作業は、職員の営舎に行く者以外は身辺及び所内の清掃である。約三週間後、日本から来た今村均大將一行と英軍艦で、二月十八日再びあのチャンギ刑務所に帰つて来たのである。(後略)

(イ・ハンネ)

捕虜たちの賠償請求

— 今後の課題

デイビッド・バレット

シドニーにある出版会社のビクトリア州支配人の職を退いてから、初めて地元元捕虜団体に関心をもつようになりました。その時には、もうビクトリア州からクイーンズランド州のタンボリン山に引越したあとでした。一九八六年一〇月に、元捕虜の全国総会がゴールドコースト(クイーンズランド州)でありまして、そのおりに元日本軍の捕虜であったジョージ・ステイブソン氏から、カナダ傷痍軍人・軍属の会は、ホンコンで捕虜となった二〇〇〇人のカナダ人にたいする虐待の賠償を、日本政府に求めるべく努力しているという新聞の切り抜きをもらいました。

切り抜きの内容を入れてから、他の州からの代表たちに、それとなく聞いてみたところ、驚いたことにオーストラリアの元軍人団体のどれ一つとして、カナダと同じようなことを考えたことがないことがわかりました。

私自身、日本軍の捕虜として三年半、チャンギと泰緬(タイメン) 鉄道などのキャンプにいたこと

- ・ 泰緬鉄道建設に従事した日本兵、連合国捕虜、ロームシャ 155
- ・ 日本軍によるロームシャ調査 164
- ・ 『毎日新報』昭和十七年五月二十三日 232
- ・ 戦争捕虜の海上輸送中の死亡率 259～260
- ・ 鉄道におけるオーストラリア部隊 266～268
- ・ 戦争捕虜の死亡率比較 268～273
- ① 第一次大戦 ② 第二次大戦 ③ 朝鮮戦争 ④ ヴェトナム戦争
- ・ 対日戦における捕虜の死亡比率 271
- ・ 『朝日新聞』一九九一年九月一七日 285
- ・ 泰俘虜収容所の編成と俘虜数 294

おわりに

一九九三年は、泰緬鉄道の完成から五〇年めの年にあたる。オーストラリアでは、本書英語版の刊行記念パーティーが、ポール・キーティング首相を迎えて開かれたという。そのあと七月には、神話的存在とまでいわれたエドワード・ウェアリー・ダンロップが、突然亡くなった。トム・ユーレンは、「人類の偉大な市民だった」彼の死を悼む追悼文を新聞に発表していた。李鶴来さんがキャンベラ会議の時に贈った「ノー・モア・ヒントク、ノー・モア・ウォー」と刻み込んだ懐中時計を見ると「心の痛みを覚える」とのガヴァン・マコーマックのインタビュー記事も紙面を飾っていた。

泰緬鉄道は、いまなおオーストラリアでは、心騒ぐ、日本の戦争犯罪として語り続けられている。だが、日本でこの年が泰緬鉄道完成から五〇年ということを意識した人がどれだけいたのだろうか。マスコミはもちろん関係者もほとんど語ることなく、鉄道は忘れ去られようとしている。日本人のこうした忘却に抗議するかのように、アジアの側から抗議の声があがった。華人系マレー人宋日開さんたち四九人が、一九八六年から鉄道建設の時の労働にたいする未払い賃金の支払い（二八八八×三年八ヶ月分）を求める手紙を日本大使館に出していたのである。アジアからの戦後補償を求める大きなう

ねりの中に、宋日開さんたちの声も合流した。戦後補償を求めるアジアの動きは、当然、戦争中の日本軍のアジアでの行動の問い直しを日本人にせまっていた。泰緬鉄道の問題もそのひとつである。こうしたアジアからの声に触発されたこともあって、これまでほとんど無視されてきた泰緬鉄道のアジア人労働者の問題にとくに注目しながら、一九九〇年秋、泰緬鉄道研究会が発足した。鉄道にかかわった人びとを、いろいろな角度から検討してみようと、専門も関心も違う人が集まって会はスタートした。会の発足直前には、カンチャナブリで大量のアジア人のものとみられる遺骨が発見されている。記録を読むだけで、土地勘も空気や風の匂いや暑さの実感もないメンバーは、会が発足するとすぐに、かつての泰緬線にそって乾期の厳しい暑さの中をビルマ（現在のミャンマー）国境まで旅行をした。だが、記録で読むような面影はすでになく、国境近くの一部を除いて、広いアスファルト道路がはしる。鉄道沿線は、すでに開発がすすみ、パイイヤ、パイナップル、マンゴなど換金作物が植えられていた。鉄道の路盤跡、刺のある鬼竹の群生はまだ所々に残り、ヒントクの作業現場の跡は、「フェルファイヤ・パス」とよばれる観光地となっていた。線路が復元され、岩山にダイナマイトを埋め込む穴もそのまま残り、金属製のプレートにはこの地で強制労働させられた捕虜たちのことが記されていた。この現場を再現したのが、ダンロップやトム・ユールンたちであることを、オーストラリアではじめて知った。トム・モリスは、ここにこの地の歴史を語る「タイム・カプセル」を埋め込んだと教えてくれた。「強制労働」の苦しみを未来に語り継ごうという、元捕虜たちの執念と怨念を知らされた思いである。

研究会は、一九九五年までにひとつの成果を出すことを目標に、いま細々と活動を続けている。一

九九一年八月のオーストラリアでのセミナーは、研究会発足間もない頃であり、また、日本側の研究報告の準備は整っていなかった。しかし、ダンロップと李鶴来さんの、戦後初めての出会いの場をつくること、また、日本人とは口をきくのもちろん顔を見るのもいやだという元捕虜が多いと聞いていたことから、とにかく元捕虜の人たちと会ってみよう、話を聞ける関係をつくってみたいと思っただけで参加した。セミナーに出席した元捕虜の人たちは、李さんの話に耳を傾け、私たちに友好的に対応してくれた。セミナー二日め、会が終わり近くになって、トム・モリスは「李さんの顔に初めて笑みがかんだ」と、注意深い観察を全員に披露して、遠来の友人の気持ちに添えてくれた。なお、セミナーに参加していたディック・ギルマン、「トゥラン・ブルーラン」（月の光）をきれいなマレー語で歌ってくれた彼が、ダンロップに先だつて亡くなっている。

本書は、当初、泰緬鉄道完成五〇年めに日本とオーストラリアの同時出版を、オーストラリア側の方が編者が計画していた。そのため翻訳作業は会議のペーパーをもとに、オーストラリアで吉永ふさ子がすすめていた。しかし、刊行された英文版には、かなりの加筆があり、新たな章や注も付されていた。このため、あらためて、内海が翻訳、点検を行ない、編集をしておいたために出版が大幅に遅れた。また、村井吉敬の報告は、英文のペーパーのみだったので、村井則子が翻訳にあたった。編集部の野畑哲哉さんには、本当に迷惑をかけてしまった。「二冊分の編集をしたみたいだ」という氏の言葉がそのご苦勞をよく言い表わしている。

353 おわりに
泰緬鉄道に関しての日本とオーストラリアの関心の差があることを考慮して、英文版にはない基本的な資料を付した。メモ、地図、駅のキ口数と俘虜収容所の位置などがそれである。また、ガヴァン

の章には、英文にない白杵ケースを加えてある。

地図作成にあたって、ひとつの新事実が明らかになった。日本で一般に使われている泰緬鐵道の地図は、鉄道隊がつくったものがベースになっている。この日本で流布されている地図が、李さんの記憶にあるヒントクの位置と違っていたのである。すなわち、タンピー——ヒントク——カンニユウというものが、鉄道隊の地図の駅順である。ヒントクとカンニユウの位置が逆になっているのではないかと、NHKの番組取材で戦後はじめてタイを訪問した李さんが指摘していた。今回、地図を作成するにあたって、多くの地図に目を通したが、ヒントクとカンニユウの位置が、鉄道隊と俘虜收容所・オーストラリア側捕虜のつくった資料と違っていた。ことは、オーストラリア人捕虜が最もこだわっているヒントク、オーストラリア人たちが「フェルファイヤ・パス」と呼んで今でもこだわり続けている場所に関することだけに放置するわけにはいかなかった。測量にあたった二松慶彦氏をはじめ鉄五の阿部宏、鉄九の菅野廉一・諸星達雄の各氏に問い合わせた。阿部、諸星両氏の御尽力もあって、この建設作業にあたった小隊長の証言、そして当時の記録の一部が発見され、鉄道隊の地図の地名が逆になっていることが明らかになった。李さんの記憶や捕虜の作成した地図にあるように、カンニユウ——ヒントクが正しい順序である。新たに発見された当時の記録によると、カンニユウとヒントクの間にマレー人集落があり、ヒントクは一五三・五五六キロとなっている。添付した地図は鉄道隊の作成したものをベースに、この二つの駅順に関しては新しい資料によった。

固有名詞の訳出にあたって、駅名など泰緬鐵道に関連したものは、鉄道隊が使用していた表記に統一した。日本人・朝鮮人名は、確認できたものについては漢字表記したが、一部確認できなかったも

のはカタカナ表記にしてある。

本書の日本語版刊行にあたっては、右のかつての鉄道隊の人びとをはじめ、オーストラリア国立大学アジア太平洋研究所、オーストラリア戦争記念館の方々にはたいへんお世話になった。また、ダンロップ氏と李鶴来さんの出会いの契機をつくってくれたNHK文化番組プロダクションの桜井均、鎌倉英也、寺園慎一の各氏、朝日新聞社企画報道部の増子義久氏、メルボルン大学の田中利幸氏にも心から感謝したい。明石書店の石井社長のすばやい決断と編集部の野畑哲哉・黒田貴史氏の粘り強い仕事ぶりにも、ここで改めて感謝したい。

一九九四年四月

内海愛子